やっとかめ文化祭

歴史まち歩き

19 参道のまち 覚王山

コース【日泰寺山門前▸▸揚輝荘】

日本とタイの友好の証 お釈迦様に見守られた参道のまち

覚王山は、シャム国（現タイ王国）よりお釈迦様の遺骨を託された場所でもあり、そこには日本文化と異国の国が融合した、ゆっくりとした時の流れがあります。
覚王山参道を中心にこの地は異国の人間とのドラマが生まれたまちでした。

① 日泰寺

日泰寺は、明治33年（1904年）にシャム（現在のタイ）国王から贈られた釈迦の遺骨を奉安するために創建され、釈尊を表す「覚王」を山号とし、日本とシャム国の友好を象徴して覚王山「日暹寺（にっせんじ）」として創建された。その後昭和14年（1939年）シャム国のタイ王国への改名に合わせて、昭和17年（1942年）「日本とタイの寺院」という意味で日泰寺と改名されました。この日泰寺は、仏教徒にとって最も価値のある真の仏舎利を奉安していることからもいずれの宗派にも属さない日本で唯一の超宗派寺院であり、19宗派の管長が輪番制によって3年交代で住職を務めている特異な寺院です。その敷地は10万坪と広大で、現在は桜やツツジのお花見や観月の名所として親しまれています。

② 鉈薬師（なたやくし）

寛文9年(1669年)、明国の帰化人で藩祖義直の御用医師を勤めた張振甫によって建てられました。医王堂とも言い、堂内には、本尊薬師仏を囲んで、円空作の日光、月光菩薩、十二神将像などが並んでいます。円空が、これらを鉈一本で彫ったことから、鉈薬師と呼ばれるようになりました。毎月21日、日泰寺の縁日にあわせて開扉されています。

③ 日泰寺奉安塔

イギリス人ウィリアム･ペッペによって発見された釈迦の遺骨はシャム(現在のタイ王国）王室に寄贈され、その分骨はさらにビルマ（現在のミャンマー）、セイロン（現在のスリランカ）、日本に分けられることになりました。明治37年（1904年）、釈迦を示す「覚王」を山号とし、日本とタイ王国の名前を冠した日泰寺が誕生し、その後、遺骨を安置するガンダーラ様式の奉安塔も完成しました。
遺骨をいれた金の塔が奉安塔の中に納められ、釈迦の遺骨はこの日を最後に奉安塔の中に塗り込められ、永久に封印されています。

④ 揚輝荘

揚輝荘は、松坂屋の初代伊藤次郎左衛門祐民氏によって覚王山日泰寺の東南に隣接する1万坪の森を切り拓いて、大正7年（1918年）から20年の歳月をかけて築かれた別荘です。
揚輝荘の構築は茶屋町本家から、三賞亭を移築したときから始まり20年間で完成しております。最盛期には、移築･新築された建物30数棟が威容を誇っていました。
かつては、各界の要人や文化人を迎える、迎賓館･社交場、またアジアの留学生が寄宿して国際的なコミュニティを形成した場所でもあります。

月見坂

月見の名所とされ、天保12年（1841年）発行「尾張名所圖會」にも書かれています。

〈注意事項〉この地図は「歴史まち歩き」の資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴でご参加ください。車などに十分注意し、各自で責任をもって行動してください。住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。●お問い合わせ：（公財）名古屋観光コンベンションビューロー　TEL 052-202-1143（この情報は平成27年2月現在のものです。）